

松下幸之助記念財団 研究助成  
研究報告

【氏名】岩間春芽

【所属】(助成決定時)京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

【研究題目】ネパール北西部農村における貧富－貧困言説による変化－

【研究の目的】

本研究の問いはネパール北西部において貧富がどのように認識されているのかである。調査村であるネパール北西部農村は、援助機関の報告書によると最貧国ネパールの中でも最も貧しいとされており、言い換えると世界一貧しい地域とされている。しかしながら、調査村の人達はこのことを肯定的に捉えておらず、このように捉えようとする人たちに対して怒っている。このことから援助機関の報告書と調査村における貧富の認識が根本的に異なるものであるということ推測できる。では、調査村における貧富の認識はどのようなものなのだろうか？本研究ではこの問いを明らかにするため、貧富に関する人類学的研究を参照し、複数のアプローチから調査村における貧富を明らかにする。問いを明らかにするためのアプローチとは①生計の立て方、②調査村における貧富の尺度は何で、それぞれの世帯がどのようにランキングされるのか、③経済的に厳しい状態にある人達がどのようにして生計を立てているのか(脆弱性への対応)、④援助機関など外部から「世界一貧しい地域」とカテゴリー化されることに対する対応、の4つである。また、近年盛んな貧富に関する分配と権利の議論も行う。

【研究の内容・方法】

① 論文の執筆

博士論文の執筆はずっと継続していたが、指導教官が無理に12月に提出せず完成度をあげてから提出した方がよいとアドバイスしたため、数か月時期を遅らせ、2012年3月ごろまでに提出する予定である。

② 学会誌への投稿

『現代インド研究』に1本論文を投稿し既に最終稿を提出済みである。『文化人類学』への投稿については、日本文化人類学会次世代育成セミナーで発表を行ったところ、内容が『文化人類学』よりも『社会人類学年報』に合うのではないかとコメントの先生にアドバイスをいただいたため、そちらの方向で書き直しを進めている。"Studies in Nepali History and Society"については投稿し、査読の返信を待っている状態である。

③ 学会や研究会での発表

学会、研究会発表は日本南アジア学会第24回全国大会、Martin Chautariは予定通り行った。日本文化人類学会の研究大会は申し込みの時期が早く間に合わなかったが、同じ日本文化人類学会の次世代育成セミナーが開催されたため、そちらでの発表を行った。これら以外にも当初予定していなかったセミナーや研究会で発表する機会が得られたのでそこでも発表を行った。日本の学会や研究会の発表を通して自分の研究の問題点を指摘してもらい、研究を向上させることができた。また、ネパールでの発表では「多くのネパール人が行ったことのない北西部のことがわかった」「北西部に限らずネパールの他の地域にも当てはまることなのではないか」というコメントをもらい、自分の研究がネパールでもある程度受け入れられるものだということがわかった。

④ 現地調査

現地調査はおおむね計画通り行い、カトマンズ周辺の書店や図書館、関連機関を回り文献収集も行い、必要としていたデータ、文献のほとんどを集めることができた。

## 【結論・考察】

まず、本研究全体の問いに対する答えとしては、調査村において外部のものと重なる部分もあるが、全体として独特の貧富の認識がなされているということが言える。①生計の立て方については小農として食糧を自給し、公務員やNGO職員、「雑業」やリンゴの栽培により現金収入を得て生計を立てているということが言える。②貧富のランキングについては主にどのような仕事をして現金収入を得ているのかが尺度となっており、安定して多くの収入が得られる公務員やNGO職員が上位で、「雑業」やリンゴの栽培などは下位にランキングされる。現金収入が多くても自分たちで耕せる以上の土地は持たない、トイレや水道などインフラの有無は貧富とは無関係である点は調査村独特のものである。③ランキング下位の世帯の脆弱性への対応については、男手がない母子家庭がそれに当てはまるが、それらの世帯も友人や親せきなどの緩やかなネットワークの中で土地や労働力を融通し合うことで生計を立てられているということがわかった。④「世界一貧しい地域の人達」という外部からのカテゴリー化に対する対応については多くの方はカテゴリー化に対して怒っているが、NGOが来れば雇用先が得られるため、あえて「貧しい」と名乗ってNGOを呼び込もうとしている人達がいるということがわかった。また、近年盛んな貧富に関する分配と権利の議論として、援助(NGO)が雇用機会として捉えられ、一部の強力なネットワークを持つドミナントカーストのみが雇用されている現状から、援助がもたらされたことで調査村の「貧しい人達」が「豊かになった」のではなく、分配が不公平であるという調査村の文脈に援助が入ることで新たな序列が生じ、格差が広まったということもわかった。

